

作：風鬼 不弐王

たいしたアリ



『たいしたアリ』

アリはまぶしげに、晴れわたった初夏の空を見上げ、感心した様子でつぶやいた。「すごいなあ。あんなに高く飛べたら、きっとこの世界の果てまで見えるんだろうな」上空ではカラスが一羽、大きく円を描いて飛んでいた。「出来ることなら、いつかボクもあんなふうに大空を飛んでみたいな」

アリは自分よりも何十倍も大きな荷物を抱えなおすと、巣に向けて再び歩き出した。冬に備えて、たくさんの食糧を貯えておかなければならないのだ。大きな木の実を運ぶのが、このアリの仕事だった。

「さあ、もう一息だ」

と、その時、バサバサバサッ！なぜかいきなり突風が吹いてきて、荷物を抱えたままひっくり返ってしまった。

「あいててて……」

しこたまぶつけた腰をさすっていると、頭の上から声がした。

「あはははは！ ごめんごめん」

どうやら、先ほど上空を優雅に飛んでいたカラスが舞い降りて来たらしい。

「大丈夫かい？ チビスケ」

「うん、なんとか大丈夫さ、カラスさん」

「ところでチビスケ、そんなところで何してたんだい？」

カラスは小首を傾げながらぶっきらぼうにきいた。

「木の実を運んでたのさ」

アリが自分よりもはるかに大きい木の実を担いでみせると、カラスは驚いて目を真ん丸くした。

「ほう！ たいしたもんだな」

「カラスさんは何してたの？」

「オレかい？ オレはな、何か物珍しい事が無いか、空からあたりを見回してたんだ。そしたらな、木の実がひとりでピョコピョコと地べたを動いて行くじゃないか。あわてて降りて来て見たというわけさ。まさかオマエさんだったとはね」

カラスはちょっと照れ笑いした。アリもクスクスッと笑った。

「ねえ、カラスさん。空の上からは世界の果てが見えるんでしょ？」

「ああ、見えるよ。けどなあ、そこに行こうとすると、世界の果ては逃げちまうんだ。いくら必死で追っかけても追いつきゃしないんだよ」

「へーえ。ボクも一度でいいから見てみたいなあ……」

「オマエさんは飛べないじゃないか」

「うん、ボクは飛べないよ。だから、カラスさん。ボクを乗せて飛んでくれないかな？
もちろん、お礼はするよ」

「オマエさんを？ そりゃチビスケのオマエさん一匹くらい朝飯前だけどな」

「好きなだけお礼はするよ。だからお願い！」

「そうか。じゃあ、今、オマエさんが運んでいる木の实、それを百個で引き受けてやるう」

カラスはずる賢い目を黒々と輝かせ、ニヤけて言った。

「百個?!」

アリは思わず聞き返した。

「ああ、ぴったり百個だ。いやならあきらめることだな」

「わかったよ。かならず百個用意するよ。それで、どこに持って行けばいいの？」

「この森のいちばん高い木のでっぺんの枝に、オレの秘密の隠し場所の穴があるんだ。
そこに百個全部運んでおいてくれ」

カラスの指し示す方を見ると、気が遠くなるくらいの高さの大木が立っていた。

「わかった。約束だよ。きっとだよ」

アリはそう言うと荷物を抱え、うれしそうに足早に去って行った。

「ふん、どうせすぐにあきらめるだろうさ。アリのくせに空を飛ぼうなんて」

意地の悪い笑みを浮かべ、カアと一鳴きして、カラスは飛び立った。

もとから働き者だったそのアリは、さらに人一倍働いた。来る日も来る日も休む間を惜しんで、せっせせっせと、カラスの秘密の隠し場所に木の実を運んだ。もちろん、ちゃんと巣にも木の実を運んだ上でのことだ。

そんな忙しい毎日が続き、夏も終わりかけたある日、とうとうアリは百個目の木の実を、カラスの秘密の隠し場所に運び終えた。

「ふう。これでようやく百個目だ」

アリは汗をぬぐい、深呼吸した。

じっとしていると秋が近いせいか、大木の頂上の風は、アリにとって少し肌寒い。

「ブルルル……。カラスさんはいつ来るのかなあ……。なんかすごくくたびれちゃったな……。巣に戻って一休みしよう……」

アリは疲れ切った身体を引きずるように、巣へと戻って行った。

アリが帰ってからしばらくして、カラスが秘密の隠し場所にやって来た。

カラスは久しぶりに穴の中をのぞくと、丸い目をさらに真ん丸くして、全身の羽を逆立て、クチバシをガバッと開けたまま、ビックリして固まってしまった。

穴の中には百個の木の実が山盛りになっていたのだ。てっきり、アリとの約束など忘れていたカラスは、たまげて思わずつぶやいた。

「あのチビスケ！ 本当に木の実を百個も運んじまったのか！」

「ちょっと、ごめんよ。おーい！ チビスケ！ いるかー？ おーい！」

迷惑そうにわらわら逃げるアリ達をかき分けて、カラスはアリの巣の入り口から大声で叫んだ。

「おーい！ 本当に一、木の実を百個も運んじまった一、チビスケのアリは一、居るかーい？」

表の騒ぎに何だろうと飛び出してきたチビスケに、カラスはクチバシで突っつかんばかりに近づいた。

「チビスケ！ オマエさん、本当に木の実を百個も運んじまったんだな！ いやはや本当に、たいしたアリだよ！ オマエさんは！」

カラスの興奮気味な様子に少し戸惑いながらも、照れ臭そうにアリは応えた。

「うん。夏も終わるくらいかかっちゃったけどね。約束どおり、ちょうど百個だよ」

うんうん、と、カラスは二度、首を縦に振った。

「カラスさん、約束どおりボクを乗せて飛んでくれるよね？」

「ああ、ああ！ もちろんだとも！」

カラスは羽を広げて、「さあ、チビスケの特等席だぞ！」と言わんばかりに、背中を向けて見せた。

「どうする？ 今すぐ飛ぶかい？ 今日は晴れわたって、絶好の空の散歩日和だぜ！」

アリは一瞬、迷ったように見えたが、微笑んでゆっくりと首を縦に振った。

「よし！ そうこなくっちゃな！」

カラスは、アリが背中に登りやすいように羽の先を地面にくっつけた。

アリはうれしそうに、いそいそとカラスの背中に這い上がり、首の後ろにしがみついた。

「さあ！ 行くぞ！ しっかりつかまってるよ！」

カアと一鳴きすると、カラスはアリが振り落とされないように、優しく、ゆっくりと羽ばたいた。

わらわら群がるアリ達やアリの巣は、あっと言う間に小さくなって見えなくなった。

「わあ！ 巣の裏に有った大岩も、うるさい犬も、いたずら好きの猫も、いつも邪魔する人間の子供達も、みんなみんな、あんなに小さくなっちゃった！」

「なあ、チビスケ。ここから見ると、あんなに狂暴な人間でさえ、たいしたことないだろう？ それに、地べたに居た時には気になっていた色々なことが、ここからは全てち

っぼけに見えるんだ」

「あ！ あのキラキラしてるのは何？」

「あれはな、海って言うんだ。でっかくて塩辛い水たまりさ。あの中には、いろんな魚もいるんだぜ」

「ふーん」

「そして、その向うが世界の果てさ」

「あっ！ 本当だ！ あそこで世界が無くなってる！」

水平線が何か知らないカラスとアリには、まるで世界がそこで終わっているように見えた。

「スゴイねえ、カラスさん」

アリは、キラキラ輝く海の向うの水平線に見とれながら、つぶやいた。

「でもね、なんとなく怖い気もするね」

アリは思わず強く、カラスにしがみついた。

「ああ、きっとすべてが、あの先の奈落の底に落ちてしまうのさ。人間のでっかい船でさえもね」

カラスは斜め下に見える大きなタンカーをクチバシで指し示した。

「きっといつかオレは、あの世界の果てに追いついて、真上から奈落の底を見てやるんだ」

「ふーん、スゴいなあ。カラスさんて、とっても勇気があるんだね！」

カラスは少し照れながら笑った。

それからしばらく、空の散歩は続いた。

「さあ。もうすぐ日が暮れるから帰ろうか」

カラスがカアカアと鳴いてみせた。

「そうだね……。なんかボク、眠くなっちゃったよ……」

そう言うと寝息をたて始めたアリを気づかい、カラスはゆっくりゆっくり、空から降りて行った。

「チビスケ、チビスケ。さあ、オマエさんの巣に着いたよ」

カラスはアリに声をかけたが、まったく起きる気配が無かった。

夏の間中、人一倍めいっぱい働き続けたアリは、とうとう疲れ切って寿命が尽きてしまったのだった。でも、アリの顔はとても安らかで、微笑んでいた。

カラスはアリを見晴らしの良い小高い丘の上に運んで、地面をクチバシでひと突きして小さな穴を作ると、そこに埋めてやった。

そして丸い目から涙を一粒流すと、カアカアカと三度鳴きながら飛んで行った。

夕焼けに赤く染まった水平線が、その丘からは良く見えた。

〈たいしたアリ、チビスケの墓〉

そう刻まれた墓標が立っていた。